

# 向き合う



2016年に成立した改正がん対策基本法や、17年度からの第3期がん対策推進基本計画のほか、国の働き方改革実行計画の中にも「治療と仕事の両立支援」という考えが盛り込まれた。企業や地域を巻き込んだ「がんとの共生」に向けて社会が動き始めた。

日本人の働き方や働くことへの価値観も変わり始めている。がんをきっかけとした小さな波纹が、次々とつながり、大きく広がっていった。

一方で、さまざまな取り組み

キャンサー・ソリューションズ 桜井 なおみさん ④

事例や研修などの事業が発表されるたびに「当事者の姿はどこにあるのか」と思う機会が増えた。大きなうねりの中で、小さな声がかき消されていないか。大企業と中小・零細企業、正規雇用と非正規雇用、都市と地方、産業医の有無……そこには大きなギャップがある。

傷病手当金制度など社会保障制度の使いづらさも課題のまま残っている。「助けてほしい人」に今の仕組みは本当に応えられているのだろうか。そんな疑問も感じている。

大切なことは、制度をつくることではなく、人が人として向き合うことだ。そして、患者自身が治療を通じた体験を人生の中でどう意味づけるかだ。

約35年前に生まれた「がんサバイバーシップ」という考え方は、がん診断後の人生の質を重視する。提唱した医師は「私たちは溺れている人を最新技術で救った後、その人が咳（せき）

## 診断後の人生の「質」重視へ

こんでむせているのに見て見ぬふりをしている」と述べた。

医療がますます進化する今、改めてこの言葉の意味を考え、社会に何が求められるのかを考える時期だ。どんなときにも患者や家族を孤独にしない社会の仕組みをつくるのが大切だ。

「がんから広げてほしい」。希少疾患の患者から託された言葉には、疾病の種類を超え、就労だけ、治癒だけではなく、人生の質についても考えてほしいという意味が込められている。これからも、就労支援をきっかけにした「診断後の人生を応援する」活動を領域を超えて発信していきたい。

病気で失ったものは大きく、多かった。でも、どんな経験であれ「人生に無駄なことは一つもない」と思えるようになっていく。周囲の力を借りながら「がんになっても安心して暮らせる社会の構築」を目指していきたい。

(この項おわり)